

佳作

心からの感謝と勇氣

福岡県 福岡県立小倉南高等学校一年 中垣 蓮

これは、夏に入ったばかりの日に、自分が自転車に乗ったまま信号を待っていた時のことです。

夏に入ったばかりで、とても暑い日だったので、風に当たりながらこいでも汗が止まらず、汗だくの状態で自転車をこいでいた時に、目の前の信号が赤になったので、止まりながら買ったばかりの水を飲んで、少し休憩をしていました。すると、

「そこにいるお兄さん、少し信号を渡るのを一緒に手伝ってくれない。」

という声が聞こえ、思わず右に振り向くと、そこには右足にギプスを巻いて、両わきに松葉杖をはさんで、少し歩きづらそうな様子のおばあさんがいました。

その様子を見た自分は、

「はい。大丈夫ですか。」

と自転車から降りて、その場で自転車を止めて、小走りでおばあさんの所にかけて寄ると、おばあさんが「ありがとうね」と言ってくれたので「大丈夫ですよ」と優しく

声をかけて、一緒に信号が青になるのを待っていました。

しかし、信号を渡る時少し人の邪魔になるような位置に自転車を止めていたので、自転車を人通りのない所に置こうと思い、すぐ左に使われていない駐車場があったので、「すいません。あの自転車を移動するので、少し待ってもらってもいいですか」と言うと、おばあさんは「いいよ。いつてらっしゃい」と言ってくれました。

「すいません。ありがとうございます」と言って、急いで使われていない駐車場に自転車を止めておばあさんの所へかけ寄りました。その数十秒後に、信号が青になったので、おばあさんが歩きやすい歩幅で進んでいきました。歩いていく途中で「両肩を支えてくれるかな」と言われたので、「はい。分かりました」と言って、程良い力で支えながらゆっくり歩いていると、あと少しで渡り切れる所で赤になってしまいました。それでもペースを速くすることなく、いつもどおりの速さで進んでいました。すると、完全に歩き終えるまで、車側の信号が青でも待ってくれている車が多く、そのあまりの優しさに「これがあたりまえのようにできるのはすばらしいな」と感動しました。

そして、何とか無事に信号を渡り切ると、止まっていた車が少しずつ動いているのが見えました。おばあさんが、「本当にありがとうね。おかげで助かったわ」と言ってくれたので、「いいえ。無事に渡ることができて良

かったです。他に手伝うことはありませんか」と、聞きました。「ごめんね。ここまでしてもらったんだけど、すぐその郵便局まで一緒についてきてもらえる」とおばあさんが言ったので、「はい。分かりました」と言って、郵便局の入口まで一緒に行ってきました。

おばあさんが郵便局でやることを終え外に出てきた時に、「ここまでしてくれて本当にありがとうね。本当に助かったわ。本当にありがとう」と笑顔で言ってくれたので、自分が「いいえ。大丈夫ですよ。帰りも氣をつけてくださいね」と言うと「はい。本当にありがとうね」と、おばあさんは笑顔で帰っていきました。

帰っている様子をしばらく見送って自転車を置いた場所に戻っている最中に、こんなに笑顔で感謝されたことがあまりないので、人に心から感謝してもらえるのは、とても幸せなことなのだなととても感動しました。

人が困っていたら助けてあげようと小学生の時から言われ続けてきました。それでも実際に困っている人を助けたという経験は自分はありません。もしかしたら、自分の周りに助けを必要とする人がいても、氣がつかずにその場所から去っていたのかもしれない。おばあさんのように助けを求めることができれば、すぐに助けることができますが、それは非常に勇氣のいることです。言葉で「助けよう」と言うのは簡単ですが、そのような場面にあった場合、助けを求める勇氣や助けようと

する勇氣がいると思います。それでも助けることができたら、自分が少し強くなれるし、大きな感謝が返ってきて自分の喜びにつながるということをあの時理解することができました。